

## インド 柑橘類の研究で日本との協力を探る

[FreshPlaza 2025年6月17日](#)

在ムンバイ日本国総領事館の八木浩治総領事は先頃、インド農業研究会議(ICAR)の中央柑橘類研究所(CCRI)を訪問し、柑橘類研究と持続可能な農業におけるインドと日本の協力を促進する1歩を踏み出した。この訪問の目的は、農業研究、特に気候変動対応型農業や精密農業、及び日本を拠点とするスタートアップ企業とのビジネス関係における2国間協力を模索することであった。

ICAR-CCRIの所長であるディリップ・ゴーシュ博士は、この訪問がインドの柑橘類栽培における日本の先進技術の導入につながる可能性があるとして、「それにより(ICAR-CCRIが所在する)ヴィダルバ地域のオレンジ生産者にとって、生産性の向上、病害虫管理の改善、輸出の可能性の向上など、新たな機会が開かれる」と述べた。総領事の訪問中、ゴーシュ博士は、柑橘類の成長と衰退の管理における研究所の役割を紹介し、耐病性、気候変動への耐性、技術の導入等、柑橘類生産者が直面する課題に対処するための世界的な連携の重要性を強調した。また、この地域における柑橘類栽培の社会経済的影響や、科学的介入を通じて農民の生活を改善する同研究所の役割についても議論した。

柑橘類生産者及び同研究所の科学者と八木総領事による交流セッションでは、柑橘類の生産における新たな技術と共通の課題に焦点が当てられた。総領事は、苗木の生産施設を見学し、柑橘類の精密栽培のためのセンサー付き点滴灌漑と地下灌漑の実験ほ場を視察した。それは持続可能な柑橘類栽培におけるインドと日本の協力の可能性を象徴するものであった。

関連するニュースとして、ゴーシュ博士はインド農業科学アカデミー(NAAS)から作物保護部門のフェロースHIP賞を受賞した。ニューデリーで開催された授賞式では、柑橘類研究における疾病診断と病害虫管理の発展におけるゴーシュ博士の功績が認められた。同博士の業績は、柑橘類栽培と持続可能な園芸農業の理解の深化に貢献するものである。同博士は、「この成果は、私の学術的な歩みに多大な影響を与えてくださった恩師や先輩方の励ましやご指導なしには成し得なかったものである」と述べた。

出典: Times of India

## インド 湾岸諸国への高級サクランボの輸出を開始

[FreshPlaza 2025年6月17日](#)

インドの農産物輸出の枠組みの強化を目的とした動きの中で、ピユシュ・ゴヤル連邦商工大臣は、ジャンムー・カシミール地域からサウジアラビアとアラブ首長国連邦への高級サクランボの最初の商業的出荷を発表した。ゴヤル大臣はソーシャルメディアの「X」で、「お祝い申し上げます。ジャンムー・カシミール地域からの最初の商業的な荷は、サウジアラビアとアラブ首長国連邦に向かっている。我が国のサクランボ生産者に巨大な市場が開かれ、彼らは今、その農産物に対してより良い価格を手にすることができる」と述べた。

同大臣は、物流の課題を橋渡しし、高品質な農産物の世界的な供給国としてのインドの地位を高めるためのこれまでの政府の取り組みを強調し、「#VocalForLocal(地元産品振興の取組み)にとっての大勝利だ」と述べた。商工省は、2024-25会計年度(4~3月)のインドの累積輸出額が前年比5.50%増の8,209億3千万米ドルに達すると予想している。

農産物・加工食品輸出振興機構(APEDA)のデータによると、インドは2023-24年度に、18億1,458万米ドル相当の生鮮青果物を輸出した。ブドウ、ザクロ、マンゴー、バナナ、オレンジが果実の輸出をリードし、タマネギ、ジャガイモ、トマト、ミックスベジタブル、青唐辛子が野菜の輸出をリードした。

これらの品目に高級サクランボを加えることで、地域の園芸セクターに市場開拓の道と財政的成果の向上の可能性がもたらされ、それによって世界的な農産物輸出におけるインドの地位が強化される。

出典: Greater Kashmir